

喉頭直下に限局性に生じた猫の良性気管狭窄の 1 例
相模が丘動物病院 呼吸器科

症例は、猫（ラグドール）、去勢オス、8 歳 9 ヶ月齢。4 年前より気管狭窄を指摘され、1 ヶ月前より喘鳴が悪化し、精査加療のため呼吸器科紹介受診。体重 3.60kg、呼吸数 16 回/分、削瘦、低音調の喘鳴、痰産生咳、頸部周囲に捻髪音、低酸素血症（ Pao_2 62mmHg）、胸部 X 線写真にて縦隔気腫を認め、気管狭窄部位の裂傷が疑われた。2 週間のケージレストで縦隔気腫が消失した。その後気管支鏡検査にて良性気管狭窄と診断し、T チューブを留置した。そのとき両側の甲状腺腫を認めた。2 ヶ月後に T チューブを抜去したが、すぐに喘鳴は再燃した。そこで 1 ヶ月後、気管管状切除・再建術を実施した。第 2-3 気管軟骨輪部は限局性にゴム状に変性していたので、この部位を切除した。術後 12 日目で気管支鏡にて癒合良好を確認した。現在術後 2 ヶ月経過するが喘鳴はみられない。猫の喉頭直下気管狭窄の報告はない。人医の知見と比較して考察する。